

山岸德平・岡一男監修

源氏物語講座

第五卷 思想と背景

有精堂

源氏物語講座

第五卷 思想と背景

昭和四十六年九月二十日発行

監修者

岡山 岸徳一

平賀男

発行者

山崎

誠

発行所

東京都千代田区神田神保町一―三九
有精堂出版株式会社

電話〇三(二九一)一五二―番

振替口座東京四〇六八四番
郵便番号 一〇一

◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。

井村印刷

3391—550805—8610

第五卷 思想と背景

源氏物語の結婚観	54	武者小路辰子
源氏物語の教育観	69	山岸徳平
源氏物語の物語論	86	松田武夫
源氏物語の和歌論	111	小沢正夫
源氏物語の音楽論	124	伊藤慎吾
源氏物語の絵画論	140	秋山光和
源氏物語の書道論	156	三條西公正
源氏物語の四季観・自然観	171	瀬古確

源氏物語の風土	189	長谷章久
源氏物語の歌枕	213	奥村恒哉
源氏物語の文芸思想	229	仲田庸幸
源氏物語と「もののあはれ」	244	小野村洋子
源氏物語の罪障意識	264	多屋頼俊
源氏物語と仏教	282	永井義憲
源氏物語における民間信仰	294	三谷栄一
源氏物語と陰陽道・宿曜道	310	村山修一

源氏物語の男性論

清 水 文 雄

一

紫式部日記の冒頭に近く、藤原道長の長男頼通が、式部らのいる土御門邸の局を訪れる場面がある。時は寛弘五年七月某日の、「しめやかなる夕暮」のことで、式部は、同僚の宰相の君と二人で世間話をしているところであった。当時、頼通は正三位東宮権大夫で、十七歳になっていたが、局の簾の裾を引き上げて入った所に、座っている。年齢の割りには、ひどく大人びた、奥ゆかしい様子で、「人はなほ心ばへこそかたきものなれ」などと、世間話をしみじみとしている態度は、「をさなしと人のあなづりきこゆるこそあしかりけれ」と思われ、こうして話していても、こちらが恥ずかしくなるくらい、立派に見える、といっている。「心ばへ」は、「氣立て」「心の持ち方」などの意で、頼通が自己反省をこめていった言葉の中に、この語が見えるのであるが、その頼通を、「心ばへ」のすぐれた青年として、忘れることのできない記憶を、式部は心に刻んでいたものであろう。

「心ばへ」を立派に保つことは、式部の人生観としても、最も重要な関心事であった。態度も行動も服装も、すべて人間の外面に現われたものは、たといほのかな表情であっても、「心ばへ」がもとになっているからである。そういえば、ここでも、あまり打ちとけない程度で、「おほかる野辺に」と口ずさんで立った頼通の挙措を、「物語にはめたるをとこの心地し侍りしか」と賞讃している。「おほかる野

辺に」は、古今集秋上に入る小野美材の、「女郎花おはかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」の第二句である。若くて、教養があり、瑞々しい感受性を持ちながら、行動に程よい節度をおきうる人物として、物語に現われてくる理想的男性を現実に見るようだった、といっているのである。しかし、逆にいえば、源氏物語に登場する男性の理想像の原型を、この頼通に見るような気がする。

式部と宰相の君と二人で物語している簾の中は、女の世界である。たとい、端近であっても、簾の裾を引き上げて入ったとすれば、頼通はすでに、女の世界の「男」になったことになる。女の世界の一員になった以上、女たちにまともに見られることは覚悟せねばならないし、さらに彼女たちに賞讃される「男」となることもできる。翻って、式部の立場からいえば、その「男」を女の世界ごと、「物語」に移調し、その登場人物として鑑賞することもまた可能である。すでに物語制作の体験者であってみれば、そういうファンタジーを描くことは容易であつたらう。「物語にほめたるをとこの心地」という言い方には、このような心理的経過を推測させるものがある。

源氏物語に登場するいかなる男性も、窮極的には、女たちに見られているという制約をのがれることができない。語り手としての女房に、作者としての紫式部に、読者としての女たちに。その制約はほとんど運命と呼んでもよいものである。従って、源氏物語に見える男性論と、同じ物語に見える女性論とを、同次元にすえて考えることはできない。雨夜の品定めを初めとする、女の階級・性格・教養等に関する数々のあげつらいは、基本的には、女である作者紫式部の、自己を含めた同性の宿世の反省にもとづく、深い人生観照に出たものといふことができる。例えば、女三宮の乳母が、兄の左中弁に、源氏への宮の取り持ちを依頼する言葉の中に、「……かしこき筋と聞ゆれど、女はいと宿世定め難くおはしますものなれば、よろづに嘆かしく」(「若菜上」四一二五)^(注1)とある所や、紫上がその晩年にわが心境を語る

長い心語の初頭に、「女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし」(「夕霧」五一六四)とある所などを讀むと、そこに、重い宿世を背負ってたゆたう女性の運命を自省する深い詠嘆が、高いリズムを奏でながら流れているのを感じる。このような、閉ざされた女性の運命の内省に裏付けられた女性論が、自然のなりゆきとして、自嘲めく口吻を伴うのもやむをえないことである。

これに引きかえ、男性に関するあげつらいは、おのずから異なった様相を呈している。さきに述べたような女性の立場からする男性論は、当然のことながら、男性への希求と願望を託したものとなる。その結果、物語の世界に、女性の賞讃に値する男性の登場が、必然的に要請されてくる。さきに引いた、「物語にほめたるをとこの心地」には、男の登場人物に対する、当時の女性たちの、このような心情が託されているとみてよい。このことは、つきつめてゆくと、女性の立場から、賞讃に値する人生を生きることを、男性に要請し、実践させたことを意味する。それは、単に賞讃に値する人生だけでなく、さらに、読者に深い哀惜と深省を誘う運命をたどらせる方向へと進んでゆく。源氏の生涯に、われわれはその軌跡をつぶさに認知することができる。そこには、男女をとわず、いかなる読者にも受けとめ切れないほどの、人生永遠の課題が提示されているのを見る。そのときわれわれは、物語世界の背後にきりめく、作者の高いモラルに気づかされるのである。

このように見てくると、「源氏物語の男性論」という題目によって与えられた課題の究明は、この物語を成り立たせる根源にまで降りてゆく作業となつてゆかざるをえない。しかしこれは、非力の私には到底堪えうる作業ではない。以下述べるところも、その方向への手さぐりが、辛うじてつかみえた二、三の問題点についての私見にすぎない。

二

源氏物語には、「ををし」という形容詞十一例、「ををしかり」という形容動詞一例、計十二例を数える。このうち、否定的に用いられたものが四例あるから、肯定的用法は八例ということになる。むろん、用例はすべて男性に限られ、その容姿・性質等を表わしている。今、肯定的・否定的の両用法に分けて、それぞれの人物名と用例数とを掲げると、つぎのようになる。

(一) 肯定的に用いられたもの

頭中将(内大臣)^(注2) 三〔葵〕二一四四、「少女」三一五八、「野分」三一二二三

夕霧 三〔藤裏葉〕三一三四一、「柏木」四一二五七・二六三三

髭黒 二〔真木柱〕三一二八九・二九九

(二) 否定的に用いられたもの

朱雀院 一〔若菜上〕四一五八

内大臣 一〔藤裏葉〕三一三四七

薫 二〔椎本〕五一二七一、「宿木」六一一四八

この簡単な一覧表からでも、興味ある傾向を認めることができる。即ち、頭中将・夕霧・髭黒というような、この物語の脇役的な人物の場合に、「ををし」(「ををしかり」は否定的用法の一例のみ)が肯定的に用いられているということである。それは何を意味するか。そのことの吟味に入るに先だって、「ををし」の語義を調べておくことにする。

「ををし」の意義について、大言海は、「剛シ^{タケ}。男ラシ。イサマシ。勇壮ナリ。(めめしノ対)」と注し

ている。これにもし漢字を当てるとすれば、「女々し（めめし）」に対して、「男々し」「雄々し」となるであろう。「男ラシ」はそこから出てくる。男をして男たらしめる特性を、剛健・勇壮・果斷・理知・明晰などの語で表わすならば、「ををし」は、これらの特性を総括する語と見てよからう。用いられる場面によって、これらのどれかに重点がかかってゆくことは、いうまでもない。ついにながら、「めめし」は、同じく大言海に、「女ノ如シ。カヨワシ。柔弱ニシテ女ラシ」とある。この語は源氏物語には四例しか見えない。即ち、源氏に一例、薫に二例、匂宮に一例である。^(註3)すべて男性の場合であり、「ををし」に縁のない源氏・薫・匂宮にこの語が用いられていることは、今後の考察にもかかわりを持つ重要な問題を提示しているように思う。いいかえれば、源氏物語の男性像には、明らかに対立する二つの類型が見られるということである。このことは、従来しばしばふれられたように、源氏物語の作中人物が、対偶方式によって設定されているということにもかかわってくる。二つの類型を、かりにA・Bと呼ぶならば、Aは「ををし」を基調とする男性像、Bは「めめし」を基調とする男性像ということになる。人間形成の過程において、Aは漢才に、Bは本才に、それぞれかわるところが大きい。Aの類型に属するものには、頭中将・夕霧・髭黒らがあり、Bの類型に属するものには、源氏・朱雀院・柏木・薫・匂宮らがある。そのことを具体的に知るために、まず、夕霧について用いられた「ををし」の三例を吟味してみることにしたい。

- (1) (内大臣ハ)御かうぶりなどし給ひて出で給ふとて、北の方、若き女房などに、「のぞき見給へ。(夕霧ハ)いとかうざくにねびまさる人なり。用意などいと静かに、ものものしや。あざやかにぬけ出でおよすけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはたたいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忠るる心地ぞし給ふ。おはやけざまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、道理ぞかし。これは才の際もまさ

り、心もちる男々しく、すくよかに足ひたりと、世に覺えためり」など宣ひてぞ（夕霧三）対面し給ふ。（「藤裏葉」三三四一）

(2) かの君は五六年の程の年長なりしかど、なはいと若やかになまめき、あいだれてものし給ひし。これはいとすくよかに重々しく、男々しきけはひして、顔のみぞいと若う清らなること、人にすぐれ給へる。若き人々は、物悲しさも少し紛れて見出し奉る。（「柏木」四二五七―八）

(3) 直衣姿いと鮮かにて、丈だちものものしう、そぞろかにぞ見え給ひける。「かの大殿は、よろづの事なつかしうなまめき、あてに愛敬づき給へることの並なきなり。これは男々しうはなやかに、あな清らと、ふと見えたまふ、にほひぞ、人に似ぬや」とうちささめきて、「同じうは、かやうにても出で入り給はましかば」など、人々いふめり。（「柏木」四二六三）

(1) は、十八歳の夕霧が、内大臣家の藤花の宴に招かれたとき、主人の内大臣が夕霧を批評する言葉の中に見えるものである。今までかたくなに禁じてきた、娘雲居雁と夕霧との結婚を、改めて許そうという気持ちに内大臣はなっていた。夕霧もそのことをうすうす察して、その日はとりわけ念入りに「けさうじて」、左大臣家を訪れた。内大臣も、冠などつけて席へ出るついでに、北方や若女房に、「のぞき見給へ」と促して、夕霧の容姿や為人を紹介してゆく。まず、夕霧は成長するにつれてますます立派になってゆく人だ、態度・物腰などは大層落ちついていて、堂々としたもので、すっきりと群を抜いて老成している点は、父源氏にもまさる有様だ、とほめておいて、改めて源氏と夕霧の比較論を試みる。「かれ（源氏）はただいと切に……これ（夕霧）は才の際も……」がそれである。この源氏・夕霧比較論は、物語の世界では、内大臣の発言の中に繰り込まれているが、基本的には、作者の男性観の間接的な披瀝ということになる。しかもここには、さきにふれた男性像の二類型が、対偶の形で打ち出されているの

である。

内大臣の場合の「ををし」の吟味は、本稿では省略に従ったが、具体的な用例から帰納されるところは、明晰・果斷・非情の資質を身に負い持つ、典型的な政治家であった。これに比べると、源氏の方は、内大臣のような政治家に必須な資質は持ち合わせがなく、後者の「もののしうたのもしげ」〔行幸三一二四七〕なのに対して、前者は、「しどけなきおほぎみ姿」〔同〕がよく似合った。そういう源氏が、「おほやけさま」では、「すこしたはれて、あざれたる方」であったとしたのは、かつて、政治の重責を担っていた頃の姿を、太政大臣の地位にある今の時点で、振り返っていったものである。この、政治家にふさわしからぬ挙措・態度を、内大臣が「道理」と許容したのは、それに代わる美質、即ち、「たゞいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地」を誘発する人間的魅力を、源氏が生まれながらにして具有していたからであろう。この生得の美質は、父桐壺院の教育方針に従って、漢才の学習に深入りすることを避けて、もっぱら本才の修得に心をひそめることによって、助成されたものと思われる。

ともあれ、この「あざれたる方」は、源氏自身もすでに、「いとあざれ、かたくななる身にて」〔少女三三四六七〕と自覺するところであり、夕霧が、「自らのあざればみたるかたくなしさを、もて離れ」ることを念じ、「すくなくしき公人にしなしてむ」〔初音三一一四六〕という方針のもとに、その教育に当たった。その結果、内大臣によって、「これは才の際もまさり、心もちる男々しく、すくよかに足ひたりと、世に覺えためり」と激賞されるような、一個の人間ができあがったのである。そこには、漢才を身につけた、凛々しい青年政治家夕霧像が浮彫りにされている。

(2)(3)は、ともに夕霧二十七歳の男性像を、故柏木のそれと対照して写し出している。日はちがうが、

同じく一条宮に落葉宮母子を訪うた場面の内である。(2)は、作者が読者に夕霧像を紹介する形で語られているが、わざわざ生前の柏木を引き合いに出したのは、常套の対偶方式もさることながら、柏木亡きあと、悲愁にとざされた一条宮の若女房たちのあこがれの眼がとらえた夕霧像として、読者に納得させようという、作者の用意からでもあろう。故人は五、六歳の年長ではあったが、なお若さを失わず、「なまめき、あいだれて」、やさしさに溢れる風姿であったのに対して、夕霧は、「いとすくよかに重々しく、男々しいきはひ」をしており、男性的な、凛々しい風采に、さらに「重々し」さを加えてきたが、顔立ちだけは、「いと若う清らなること」絶倫であるという。(3)になると、女房たちの夕霧評が、直接の言葉として語られている。女房たちの視野に入った夕霧の直衣姿は、大層鮮やかで、背丈も堂々と高く、すらりと見える。女房たちの心にすでに定着している柏木像に対比して、夕霧の「男々しいはなやかに、あな清らと、ふと見えたまふ」その「にほひ」は、これまた比類がない、と賞讃する。「同じうは、かやうにても出で入り給はましかば」という願望が、夕霧に対する女房たちのあこがれに裏打ちされていることは、いうまでもない。

以上、「ををし」の語を含む三個の用例によって、夕霧の男性像をなぞってみたわけであるが、ここに「ををし」を中核とする数個の語群によって、総括的にとらえられるものは、男らしく、凛々しい、そして清らかな気品をおのずから具えた、「まめ人」夕霧の男性像である。夕霧もまた、「物語にほめたるをとこ」の一人であったことができる。もとより、今日の「男性的」という言葉から誘発されるイメージとは異なり、多分に女性的要素を持ったものである。これは、この物語に登場する男性が、すべて女の世界の「男」としての制約を免れることができないことにもとづく。それにしても、「ををし」を基調とする男性像、つまりAの類型に属する人に共通に見られる性格は、心情よりも理知に傾き、

混沌よりも明晰を好み、総じて凛々しさが見られる反面、冷たさの印象は避けられない。その結果、内大臣のように、抜群の才幹に恵まれながら、非情の人として作者の非難を浴び、夕霧のように、「まめ人」として遇されながら、「まめ人の心かはるは名残なくなむ」(「夕霧」五―八三)という脆さを露呈することにもなる。逆に、薫のように、「もとよりけはひはやりかに男々しくなどはものし給はぬ人」が、「まことにしみて深き所」(「野分」三―二三)の欠けた内大臣などとはちがい、非運の中君の心中を察して、「いよいよしめやかにもてなしをさめ」(「宿木」六―一四八)ることのできる人として尊重されるのである。

作者が、作中の男性に何を期待しようとしているか、その方向がここにも暗示されているように思う。

三

周知のように、「少女」の巻には、源氏が、元服したての夕霧に対する教育方針を、夕霧の祖母大宮に披瀝する場面がある。そこには、一世の源氏としてのおのれの生い立ちと経験を回想し、皇孫である夕霧の将来を慮って、「目慣れたる事」(「少女」三―四三)を排し、独創的な教育を施そうとする意図を見ることが出来る。夕霧教育についての、源氏のこのような考えの中には、「なほ才を本としてこそ、大和魂の世に用ゐらるる方も強う侍らめ」(「少女」三―四四)という、作者の生きた時代の通念が、その考えを成り立たせる根拠として導入されている。「才」はいうまでもなく漢才であるが、「大和魂」は「大和心」ともいい、「思慮・判断・分別を、十分に働かして、常識的に処置する性質・能力」で、日本人が生まれながらにして具有するものとされ、一種の現実処理能力をいう。この能力を十分に発揮するためには、基礎的教養として「才」の修得が必要であるというのである。元服した夕霧が、親王の子息

に準じて、從四位下に奏請されるものと思つていた当てが外れたことを、恨みに思つてゐるらしい、と大宮から聞いた源氏は、「学問などして、すこし物のこころ得侍らば、そのうらみは、自ら解け侍りなむ」(少女「三一四五」)と答えている。この「物のこころ」を得るとは、「学問」(才の修得)などをして、物の道理を会得することという。その段階を経れば、「大和魂」が発動して、夕霧の「うらみ」は自然に解消するだろう、というのである。

しかし、人生には、この能力だけで処理できない問題が立ち現われることがある。第二部に入つて、源氏のつぶさに嘗める苦悩は、そのことをわれわれに教えている。事はすでに人間存在の根源にかわり、風雅の殿堂六条院の調和が、愛恋の「あはれ」の破綻にともなつて崩壊する、冷厳な現実に向面するに当たっては、「見そめ給ひてむ人を、御心とは忘れ給ふまじき」源氏の「御心掟」(少女「三七七」)をもつてしても、ましてや、豊かな才学の上に立つた世才をもつてしようとも、到底手に負えないもののあることを、源氏自身が思い知らされるのである。

さて、ここでは、第二部に入つて、光源氏の世界に終焉をもたらす端緒をつくつた、女三宮・柏木事件の当事者柏木を取り上げて、この問題を考へてみることにしたい。

柏木は頭中將の長男で、源氏の長男夕霧には数歳年長の従兄弟にあたり、また父親同志がそうであつたように、この二人も親友の間柄であつた。頭中將・夕霧が、私のいう「ををし」を基調とするA類型に属するのに対して、柏木は源氏とともに、「めめし」を基調とするB類型に属する男性である。柏木が「若菜」「柏木」の巻々で果たしている役割は大きい。ここでは、作者がこれらの巻々において、柏木にどのような生き方を要請しているか、いいかえれば、何を彼に課しているかを、「若菜上」(四一〇七—一一一)の蹴鞠の場面の分析を通してうかがつてみようと思う。

愛恋の「あはれ」の破綻からくる苦悩は、それが極限的な状況に追い込まれるとき、それから解き放ってくれるものは、当時としては、窮極的には「出家」と「死」の道しかなかったであろう。しかし、この物語では、このような苦悩からの脱出を志して決行された出家の例は、女性には、藤壺を初めとして、朧月夜・空蟬・女三宮・浮舟らの名をあげることができるが、男性にはその例を見いだせない。これらの女性たちの決断と実行は、彼女らがみずから選びとった新しい生き方であるだけ、閉ざされた女の世界に、爽やかな曙の光を呼ぶものとして、意義が深い。ただ、男性としての柏木だけが、女三宮事件で、自責と悔恨の苦悩のはて、悶死のような状態で命絶えた例を見のがすことができない。

柏木という一人の若者に、「死」を与えたことは、藤壺以下の女性たちに「出家」の道を歩ませたことに匹敵する意義をもち、作者の男性観が、全く新しい人間像の造型を目ざしていることを物語る。従って、作者の、柏木という名の青春の「愛と死」によせる共感と哀惜には、並々ならぬものが感じられ、その行文に高い詠嘆の調べが聞かれるのも、そのことに因由すると思われる。

準太上天皇となった源氏には、これといった政務もなく、六条院には「無事」の日がつづく。時は、源氏四十一歳の「三月ばかりの空うららかなる日」。栄華の絶巔に座して、「つれづれ」をもてあます初老の源氏の姿がそこにある。その「つれづれ」をまぎらすために、「何わざしてか暮すべき」と、ふとわが孤独のすべなさを洩らす。「今朝大将のものしつるは何方にぞ。いとさうさうしきを、例の小弓射させて見るばかりけり。好むめる若人どもも見えつるを、ねたう出でやしぬる」といって、夕霧を中心とする「若人ども」の登場を促す。その夕霧は、「丑寅の町」で、蹴鞠を見物しているところであったが、源氏に呼ばれて、今まで鞠をもてあそんでいた連中であらう、「若君達めく人々」を大勢つれてきた。蹴鞠は「乱りがはしき事」であるが、「さすがに目さめてかどかしき」ものだという。源氏は、